

[授業科目名] 小児医学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 篠田 晃
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 子どもの脳と心の発達とその障害について説明できるようになる。 ① 子どもの脳機能の発達が説明できる ② 脳の構造を説明できる ③ 脳の発達と分化を説明できる ④ 脳の機能障害について説明できる			
授業の概要 上記の到達目標に示した領域から、予め与えられた課題（テーマ）を予習し発表する。これを受けて質疑応答を行い、より深い理解に至るよう努める。			
学生に対する評価の方法 毎回の発表内容・質疑応答内容（30%）と理解度（30%）、考え方（20%）、意欲（20%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回【講義】知能の心理学的基礎 第 2 回【講義】知能の生理学的基礎 第 3 回【講義】知的障害の発生要因 第 4 回【講義】知的障害児の感覚機能 第 5 回【講義】知的障害児の注意・記憶 第 6 回【講義】知的障害児の学習 第 7 回【講義】知的障害児の運動機能 第 8 回【講義】知的障害児の言語・コミュニケーション 第 9 回【講義】知的障害児と健康問題 第 10 回【講義】注意欠如多動症 第 11 回【講義】自閉スペクトラム症 第 12 回【講義】パーソナリティの形成 第 13 回【講義】脳の性分化 第 14 回【講義】ジェンダー 第 15 回【講義】まとめ			
参考書（教科書は特に指定しない） ベアー、コノーズ、パラディーソ「神経科学～脳の探求～」 勝二博亮「知的障害児の心理・生理。病理」北大路書房 杉山登志郎「発達障害の子供たち」講談社現代新書 本田秀夫「学校の中の発達障害」SB 新書 岩波 明「誤解だらけの発達障害」宝島新書			
自己学習の内容等アドバイス 子どもの発育・発達、病態生理などの基礎知識に裏打ちされた生きた知識の習得を心掛けて欲しい。特に脳の構造や機能そしてその発達の実体に基づいて子どもたちの発達や障害を理解し、世の中に氾濫する医学・健康に関する様々な情報に惑わされることなく、他者に説明ができるようにしてほしい。予習・復習は1時間程度できると良い。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校安全と危機管理		講義・演習	木宮敬信 藤井佳代子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学校安全の基礎知識を身に付け、具体的に学校安全計画や危険等発生時対処要領の作成に役立てることができるようになる。学校における事故や災害の現状と課題を理解し、事故防止のための実効性のある安全管理や安全教育の方法を提案することができるようになる。</p>			
授業の概要			
<p>学校における児童生徒の事故は減少傾向にある一方で、学校や教職員に求められる役割や責任は大きく、実効性の高い安全管理や安全教育の充実が求められている。本講義では、学校や教職員に求められる学校安全の基礎的知識を学ぶと共に、具体的な危機事象を想定した実効性の高い管理計画立案、学校種や発達段階を考慮した実践的な安全教育の方法等について、演習を交えながら理解を深める。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>講義への取組態度（2割）、各講義の提出レポート（3割）、講義内での理解度確認（5割）などを目処に総合的に評価を行う。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<p>第1回 学校安全の意義と安全管理と安全教育の進め方 第2回 学校安全計画、危険等発生時対処要領の作成、改善の仕方 第3回 災害共済給付制度と体育・スポーツ事故の現状と課題 第4回 登下校の安全管理と安全点検 第5回 自然災害、犯罪、交通事故等の発生に備えた安全管理 第6回 自然災害、犯罪、交通事故等の発生に備えた安全教育 第7回 発達段階や学校種における留意点 （第1～7回：木宮） 第8回 危機の未然防止対策（環境整備、職員の健康管理） 第9回 危機の未然防止対策（傷病者の発生防止対策） 第10回 危機の未然防止対策（感染管理） 第11回 危機発生に備えた対策（家庭、地域、関係機関等の連携） 第12回 発生時の危機管理（心肺蘇生法 AED） 第13回 発生時の危機管理（アナフィラキシー） 第14回 発生時の危機管理（熱中症 外傷） 第15回 事後の危機管理（心のケア） （第8～15回：藤井）</p>			
使用教科書			
<p>必要に応じてプリントを配布する</p> <p>参考書：学校安全資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育（文部科学省） 学校事故 知っておきたい！養護教諭の対応と法的責任 入澤充著（時潮社）</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>各回の講義テーマに関して、実際の事故や災害の事例等を web や新聞、雑誌等から授業前に入手しておくことが望ましい（事前学習 90分）。また、授業で学んだ内容をノート等にまとめ、日々報道される児童生徒の事故被害や安全対策事例、学校安全に関する裁判事例等を加筆していくとよい（事後学習 90分）。</p>			

[授業科目名] 教育の歴史と教育理論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西村公孝
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>授業の到達目標は、西洋及び日本の教育の歴史を理解し、教育思想、学校教育制度、教育や教育課程(カリキュラム)について、具体的な資料を通して考察し保育・教育に関する多角的・多面的な見方・考え方を修得する。テーマは、人間の成長、人間関係の構築に関する教育の歴史と理論を主体的・対話的に考察し、教育学における学問研究の奥深さ、面白さを味わう探究学修を行う。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>西洋及び日本を中心とした教育の歴史と学校教育や家庭教育に関する教育理論を探究する。具体的には教育思想の背景やルソー、フレーベル、ヘルバルト、デューイ、ブルーナーなどの教育思想と近代学校教育制度の成り立ちについて概観する。また、日本の教育の歴史について明治期まで教育制度と戦後の学校教育の動向について、教育課程の変遷や学力論争を検討し、子ども・教師(保育者)・保護者の視点から学校教育の諸問題を考える。具体的には学校・学級経営、授業理論、生徒指導(イジメ・不登校・虐待・貧困など)、特別支援教育やキャリア教育などの課題について、幼児・児童の保育・教育(成長・発達)の視点から考える。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回の振り返りや事前学修としての課題のまとめ、発表を評価する。 ・講義中の意見交換やグループでの協働的な学びの意欲・態度等を評価する。 ・授業参画(20%)、課題のまとめ・発表(40%)、毎回の振り返りと理解度確認(40%)として総合評価を行う。 			
<p>授業計画(回数ごとの内容等)</p> <p>第1回 なぜ人間にとって教育は必要かを考えるー子どもの発達、成長と教育の目的ー</p> <p>第2回 教育の歴史や思想にはどのような考えがあるか、その体系・構造や歴史の背景を理解する</p> <p>第3回 西洋の古代から中世までの教育思想、教育制度などの歴史を考える</p> <p>第4回 西洋の近現代の教育の歴史を考える(ルソー、フレーベル、ヘルバルトなど)</p> <p>第5回 西洋になぜ新教育運動の歴史や思想が芽生えたのかを考える(デューイ、ブルーナーなど)</p> <p>第6回 学校教育制度の変遷を考えるーなぜ、学校が普及していったのかー</p> <p>第7回 日本における学校教育制度の変遷と日本国憲法下での教育制度と教育政策を考える</p> <p>第8回 戦後の教育課程の変遷と教育改革の歴史(学力論争など)を考える</p> <p>第9回 幼児期から児童期にかけての子どもの発達や成長に関する理論を考える</p> <p>第10回 学校経営、学級経営の理論を考える</p> <p>第11回 教科指導、学習指導における授業理論について考える</p> <p>第12回 現代の教育問題(いじめ・不登校・虐待・貧困問題など)から生徒指導について考える</p> <p>第13回 ノーマライゼーションの視点から特別支援教育の在り方や理論を考える</p> <p>第14回 キャリア教育の理論から教育の未来を考えるーキャリアプランニング能力の必要性を考えるー</p> <p>第15回 振り返りと理解度確認</p>			
<p>使用教科書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書は使用しない。必要に応じて関連の資料プリントを毎回配布予定。参考図書として下記の教科書等を活用する。 ・貝塚茂樹、広岡義之編著『教育の歴史と思想』ミネルヴァ書房、2020年。 ・安彦忠彦、石堂常世編著『最新教育原理』勁草書房、2020年。 ・広岡義之編、北村信明(絵)『絵で読む教育学入門』ミネルヴァ書房、2020年。 			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受講生は、次時の学修内容(課題)を確認し、課題の下調べを行うとともに本時の振り返りとしての事後学修を行い、講義に関連する家庭学修とし1時間から1.5時間程度の時間を確保することが望ましい。 			

[授業科目名] 発達障害特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 光代
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>発達障害児教育に焦点を当て、教育理念、教育制度、指導観、指導方法、社会の意識、福祉制度等についての歴史を概観すると共に、指導方法における国内・国外の文献や映像資料を活用した講義並びに討論と発表を通して研究上の今日的課題を考察し、自ら学びを深めることができるようにすることを目的とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>自閉スペクトラム症 (ASD)、学習障害 (LD)、注意欠如多動性障害 (ADHD) などの発達障害の指導方法について、特に教育現場における実践内容や実践課題に注目しながら授業を展開する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>評価は授業への出席率 (30%)、討論を含む授業への貢献度 (30%)、最終レポート (40%) 等で総合的に評価する。</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第 1 回 ガイダンス (各回の授業内容の説明) 発達障害児教育の歴史① (教育理念・教育制度)</p> <p>第 2 回 発達障害児教育の歴史② (指導観・指導方法)</p> <p>第 3 回 発達障害児教育の歴史③ (社会の意識、福祉制度)</p> <p>第 4 回 ASD の映像資料視聴と文献研究①</p> <p>第 5 回 ASD の指導方法に関する文献研究② (討論・発表)</p> <p>第 6 回 ASD の応用行動分析学による指導方法</p> <p>第 7 回 LD の映像資料視聴と文献研究①</p> <p>第 8 回 LD の指導方法に関する文献研究② (討論・発表)</p> <p>第 9 回 LD (特に発達性ディスレクシア) の指導方法</p> <p>第 10 回 ADHD の映像資料視聴と文献研究①</p> <p>第 11 回 ADHD の指導方法に関する文献研究② (討論・発表)</p> <p>第 12 回 ADHD の支援教材を用いた指導方法</p> <p>第 13 回 事例検討① (ASD 児の小学校生活における困難性)</p> <p>第 14 回 事例検討② (LD 児への合理的配慮)</p> <p>第 15 回 授業のまとめ・レポートの発表</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特になし。適宜資料を配布する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>発達障害とは診断されないが、通常の学級で何らかの困難を抱えている子どもは多い。いわゆるグレーゾーンと呼ばれる子どもは、幼児教育施設においても増加している。新聞記事やニュースに関心をもち、発達障害児への指導方法について関心を高めて欲しい。毎回資料を配布するので、その内容に関連した論文や著書を読み、自分なりのノートを作成し第 14 回で提出してもらうので、特に事後学習 (目安として事前・事後学習時間を合わせて 120 分程度) を丁寧に積み重ねて欲しい。</p> <p>主な参考図書</p> <p>① 発達障害の原因と発症メカニズム 脳神経科学からみた予防、治療・療育の可能性 黒田洋一郎、木村・黒田純子 河出書房新社</p> <p>② 脳からみた学習 新しい学習科学の誕生 OECD 教育研究革新センター (編著) 小泉英明 (監修) 小山麻紀/徳永優子 明石書房</p> <p>③ LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 東洋館出版社</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子育て支援特論		講義	未定
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人々の働き方や家族構成が多様化する現代において、子育てに関する社会的支援も増加し多様化してきた。そのため保育・教育に携わる者に求められる援助技術も、複雑化、多様化している。この授業では、保護者の子育てを支えるために必要な知識を多角的な視点から得ることで、実践力、判断力をより研鑽させることを目的とする。日本だけでなく、諸外国の子育て環境に対する理解を深めることで、専門的知識に沿って保護者の支援ができるようになることに加え、文化の違いや育児に関する価値観の異なりを踏まえて子育てについて思考できることを目的とする。</p> <p>また、授業内での活動を通し、主に保育分野に関する論文を読む力を身に付ける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>毎回、教員の指定したテーマに沿った論文または文献を読み、レジメを作成の上、発表を行って意見交換をする。履修者多数の場合には、輪番制で発表者を決定するが、他の学生についても必ず資料は熟読の上、授業に出席すること。事後学習として、授業内で分からなかった語句や内容をさらに調べたり、論文の探し方、読み方、引用の仕方、書き方に関する情報等をまとめたりすること。授業内では、ウォーミングアップとして、子育てに関する悩み相談のトピックを取り上げ、議論を行う。また、必要に応じてゲストスピーカーや学外教育活動を実施する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>授業内での発表とディスカッション 50%</p> <p>まとめレポート 50%</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 オリエンテーション 授業の進め方 子育て支援とは何か</p> <p>第2回 子どものいる生活（保育学の視点から）</p> <p>第3回 親になること（発達心理学の視点から）</p> <p>第4回 家族と子育て（家族心理学の視点から）</p> <p>第5回 子育てに対する世間一般的な理解（社会学の視点から）</p> <p>第6回 保護者が抱える日本での子育ての課題（女性学の視点から）</p> <p>第7回 保育施設における子育て支援（保育学の視点から）</p> <p>第8回 保育者による子育て支援（保育学の視点から）</p> <p>第9回 諸外国における子育ての文化と制度 スウェーデンの場合（比較文化学の視点から）</p> <p>第10回 諸外国における子育ての文化と制度 カナダの場合（比較文化学の視点から）</p> <p>第11回 諸外国における子育ての文化と制度 中国の場合（比較文化学の視点から）</p> <p>第12回 諸外国における子育ての文化と制度 アメリカの場合（比較文化学の視点から）</p> <p>第13回 子育て支援の効果（経済学の視点から）</p> <p>第14回 労働としての子育て支援（経済学の視点から）</p> <p>第15回 まとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特になし 授業内で参考文献を適宜、紹介する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>事前学習として、指定された資料を読んで要約し、発表原稿を作成する（60～180分程度、個人差による）。</p> <p>事後学習として、調べ学習及びノートのまとめを行う（45分程度）。</p>			

[授業科目名] 社会福祉特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 石垣儀郎
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本授業の目的は社会福祉学分野における理論と実践の方法論を身につけることである。具体的には理論と研究方法について文献を用いて理解できるようにする。次に、実践・方法論においては受講者が関心のあるテーマの先行研究を分析し、研究課題を設定できるようにする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>諸外国における社会福祉の歴史の変遷を概観し、我が国の福祉の現状と課題を考察する。最終的には受講者が社会福祉領域の中から、関心のある分野について研究設定できるように授業を展開する。ディスカッションを通して社会福祉各領域における課題についての検討を行う。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>講義での報告と討議 30% 出席状況 20% 最終レポート 50%</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 社会福祉学研究の目的・対象・方法論についての解説（イントロダクション） 第2回 社会福祉学における研究方法 第3回 社会福祉学領域の理論研究・児童福祉 第4回 社会福祉学領域の理論研究・障害福祉 第5回 社会福祉学領域の理論研究・精神保健福祉 第6回 社会福祉学領域の理論研究・社会構造と格差 第7回 社会福祉学領域の理論研究・社会生活と貧困・ジェンダー 第8回 社会福祉学分野の文献研究 1（資料収集と分析） 第9回 社会福祉学分野の文献研究 2（ディスカッション） 第10回 社会福祉学分野の文献研究 3（ディスカッション） 第11回 社会福祉学分野における歴史研究の位置づけ 第12回 社会福祉学分野における先行研究の分析 1 第13回 社会福祉学分野における先行研究の分析 2（ディスカッション） 第14回 社会福祉学分野における先行研究の分析 3（ディスカッション） 第15回 全体のまとめ・ディスカッションと最終レポート作成課題</p>			
<p>使用教科書</p> <p>受講者と相談したうえで決定する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>授業前後に関連する専門書を読んで、関心のあるテーマについて調べる。授業内で関心のあるテーマについてディスカッションできるよう配慮しますので、要望などお伝えください。テーマについての検討や考察を行うためには、少なくとも毎日90分程度の学修時間は必要と思います。</p>			

[授業科目名] 多文化共生特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 宮川 公平
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>近年、多文化共生という言葉が多く聞かれるようになってきている。その背景には、コロナ禍以前から在留外国人が増加の一途をたどり、多くの自治体で多文化共生政策を打ち出すようになってきていることがあげられる。外国人が集住する地域においては以前から多文化共生のための事業を打ち出し、特に教育現場ははやくから外国にルーツを子どもたちの受入れの政策を採用しているものの、子どもたちの間の教育格差が課題として指摘されている。ここでは、日本におけるニューカマーに注目し、地域の多文化化の現状と課題を理解するとともに、外国にルーツをもつ子どもたちに対する支援のあり方について考える。また、適宜、歴史的な文脈における在日コリアン、中国人、台湾人、そしてアイヌ民族や琉球民族についても触れていく。本コースを通して「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力・人間性等」を身に付けるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>毎週ごとのトピックに対して、ディスカッションを含め授業内での発話が求められます。受講生は、他者と話し合うため、トピックについての自身の意見をまとめておくなど準備ができていることが求められます。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>ディスカッション・発話を含む授業参加 40%、最終レポート 30%、発表 30%</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 多文化主義と多文化教育 第3回 日本における多文化共生 第4回 日本の外国人が抱える問題 第5回 地域社会と多文化共生 第6回 多文化共生のための教育：人権教育と世界市民教育 第7回 教室のなかの多文化共生：外国につながる子どもたちへの対応 第8回 地域日本語教育とコーディネーター 第9回 日本語教育事例：中津川市における日本語教室の実践 第10回 国際結婚と法～国籍に関する日本の法律を含め～ 第11回 国際結婚家族とバイリンガル 第12回 共存から共生へ 第13回 ディスカッション：各自の研究テーマの要約比較 第14回 レポート発表 第15回 授業のまとめとレポート提出</p>			
<p>使用教科書</p> <p>必要に応じて文献・資料を配布する</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>事前学習として指定された文献や自己調べなど 90 分、事後学習として 90 分 合計 180 分が求められる。</p>			

[授業科目名] 統計解析特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 高橋 和文
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考] 授業内でPCを使用するので持参のこと。	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>基礎的な統計学の知識をもとに、教育、心理、保健、福祉等の学問分野の課題を解決するための、統計解析手法が実践できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>調査データを分析するための統計解析法を概説する。PCを使って、例題を分析しながら、実践的な統計解析法を学ぶ。また、分析結果をグラフ等で可視化するための手法を紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>講義中の課題（70%）、および、講義中におけるプレゼン発表（30%）により評価する。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 ガイダンス RのインストールとR言語の基礎</p> <p>第2回 基本統計量とデータの可視化</p> <p>第3回 代表的な確率分布</p> <p>第4回 確率論／ベイズの定理</p> <p>第5回 検定の考え方／点推定と区間推定</p> <p>第6回 適合度の検定／比率に関する検定と推定</p> <p>第7回 質問紙調査の基礎</p> <p>第8回 独立性の検定／相関係数の検定と推定</p> <p>第9回 2個の代表値の差の検定</p> <p>第10回 3個以上の代表値の差の検定／多重比較</p> <p>第11回 回帰分析／重回帰分析</p> <p>第12回 因子分析／主成分分析</p> <p>第13回 決定木分析／ランダムフォレスト</p> <p>第14回 時系列分析の基礎</p> <p>第15回 プレゼン発表、および、まとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <p>教科書は、受講者と相談して決定する。</p> <p>主な参考書</p> <p>東京大学教養学部統計学教室編、1991、統計学入門、東京大学出版会</p> <p>中村好一、2016、基礎から学ぶ楽しい保健統計、医学書院</p> <p>清水優菜、山本光（著）、2020、研究に役立つ JASP によるデータ分析 - 頻度論的統計とベイズ統計を用いて -、コロナ社</p> <p>平井明代、岡秀亮、草薙邦広（編著）、2022、教育・心理系研究のためのRによるデータ分析 - 論文作成への理論と実践集、東京図書</p> <p>中原治、2022、基礎から学ぶ統計学、羊土社</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>事前学習は、教科書を読んで予習をする。（1時間）</p> <p>事後学習は、授業中の課題を復習する。（2時間）</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子どもケアフィールドワーク		演習	指導教員
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
4	選択	日進市内の保育所、小学校、中学校、附属幼稚園、学部付設子どもケアセンターにおける実践的研究	
授業の到達目標及びテーマ 各専門分野のフィールド研究の方法論を深く学びながら、院生各自の研究テーマを位置づけることで、新たなフィールド研究の方向性を見出すことができる。			
授業の概要 修士論文に結びつく課題研究を前提に、本研究科の教育課程を構成する応用研究の5領域毎に、院生一人ひとりが思考する分野の実証、実践的な研究の場として、当該研究科が設置される日進市の中学校、小学校、幼稚園、保育所、医療機関、児童施設及び子育て支援組織等で、実践的・臨床的研究を行う。 また、各フィールドにおいて初等教育の臨床的経験・調査、幼児教育における環境構成・児童文化、児童相談の専門的援助活動の現状と課題、医療機関における保育士の必要性などのフィールドで観察を行う。これらの体験を通して、子どものリアルな姿を把握し、子どもケアの実際を理解するとともに、各自の研究課題を探索的に発見することを目指す。発達臨床の立場による乳幼児期の遊びの観察、統合保育・教育の実際、児童への学級や保健室での支援、小中学生における学校カウンセリング・心理療法の実際・虐待等に対する子どもケアセンターの相談の内実や相談の過程を取り上げる中で、院生一人ひとりが子どもケアの在り方について考察する。			
学生に対する評価の方法 授業中の活動度(40%)、レポート(30%)、フィールドワーク先からの評価(30%)により総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 フィールドワーク先の決定及び研究課題の設定 第2回 フィールド研究の方法論にかかわる先行研究の概観 第3回 フィールドワーク先でのデータ収集方法の確定 第4回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修～観察：保育・教育～ 第5回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修～インタビュー：保育者・教諭～ 第6回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修～事例検討：保育・教育～ 第7回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修からの仮説生成：保育・教育 第8回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修～観察：子育て支援～ 第9回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修～インタビュー：子育て支援員～ 第10回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修～事例検討：子育て支援～ 第11回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修からの仮説生成：子育て支援 第12回 保育・教育・子育て支援の視点から考える今日的課題 第13回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修並びにレポート等の発表と検討 第14回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修並びにレポート等の発表と検討 第15回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修並びにレポート等の発表と検討			
使用教科書 その都度指定する			
自己学習の内容等アドバイス フィールドワーク先における現状について理解を深めるとともに、諸問題についても自分なりの意見が見いだせるよう、積極的に取り組むこと。			

[授業科目名] アカデミック・ライティング		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 齋藤芳子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>受講者のアカデミック・ライティング技能向上を目的とする授業です。アカデミック・ライティングとは学術的な著述のことです。著述プロセスの各段階における具体的なノウハウを理解すること、ノウハウを適用して著述の修正ができること、責任を持って自分の著述を仕上げられることを到達目標とします。アカデミック・ライティングに対する漠然とした苦手意識や戸惑いを解きほぐしていきましょう。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>アカデミック・ライティングには、形式や作法、問いの設定、文献探索、論理構成、文章表現といった様々な要素があります。受講者には、これらの要素を授業中の課題や最終レポート作成を通じて会得し、修士論文作成に役立てることが期待されます。また、意見を出し合うなど受講生間で学びを深めてもらいます。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>ミニワーク（70%）＋最終レポート（30%）、最終レポートの提出がない場合は「不合格」となります。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 イントロダクション：アカデミック・ライティングとは何か 第2回 学術論文とは（1）：問いと論証と答え 第3回 学術論文とは（2）：実践 第4回 論証の基本（1）：主張を支える根拠と論拠、論文のアウトライン 第5回 論証の基本（2）：実践 第6回 先行文献を扱う（1）：探し方、表示方法 第7回 先行文献を扱う（2）：実践 第8回 文献研究と実証研究（1）：クリティカル・リーディング、調査依頼書／実験方法 第9回 文献研究と実証研究（2）：実践 第10回 ライティングの基礎（1）：パラグラフライティング、アカデミックな表現 第11回 ライティングの基礎（2）：実践 第12回 各パートの書き方（1）：序章と要旨 第13回 各パートの書き方（2）：実践 第14回 仕上げ（1）：推敲と校正 第15回 仕上げ（2）：まとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <p>教科書は指定せず、適宜資料を Moodle に掲載します。以下は参考になる書籍です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 井下 千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』（第2版）慶應義塾大学出版会。 ● 上野 千鶴子（2018）『情報生産者になる』ちくま新書。 ● 小熊 英二（2022）『基礎からわかる論文の書き方』講談社現代新書。 ● 河野 哲也（2018）『レポート・論文の書き方入門』（第4版）慶應義塾大学出版会。 ● 木下 是雄（1981）『理科系の作文技術』中公新書。 ● 佐渡島 紗織・吉野 亜矢子（2021）『これから研究を書くひとのためのガイドブック：ライティングの挑戦 15 週間 第2版』ひつじ書房。 ● 戸田山 和久（2022）『最新版 論文の教室ーレポートから卒論まで』日本放送出版協会。 ● 西山 聖久（2019）『最短ルートで迷子にならない！理工系の英語論文執筆講座』化学同人。 			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>授業時間外に、課題提出（平均 120 分）および授業の振り返り（平均 60 分）に取り組んでください。</p>			

[授業科目名] 幼児教育学特論 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 津金 美智子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本授業では、幼児期の教育について文献、及び、文部科学省における中央教育審議会、こども家庭庁におけるこども家庭審議会の論点、さらに、学校教育等の最新情報を通して、理論的な理解を深めると共に、実践上の課題等についてディスカッションを行い、幼稚園教諭専修免許状に必要な専門性を高める。</p> <p>【到達目標】① 幼児期の教育の不易、及び、現代的課題に関する最新情報を基に、幼児期の教育の在り方について議論できるようになる。</p> <p>② ①を通して、適切な研究課題を明確にもち、追究できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本授業は、幼児期の教育に関するテーマを設定し、文献等の輪読を行い、テーマに基づく知見を深めると共に、最新の審議会情報等を通して、研究課題を明確にする。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>各回における授業への姿勢と最終レポートにより評価する。(授業姿勢 20% レポート 80%)</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>授業計画</p> <p>第 1 回 オリエンテーション 授業の概要 目的 テーマの設定について</p> <p>第 2 回 講義 幼児教育の基本 目的及び目標 重視すべき事項について</p> <p>第 3 回 講義 環境を通して行う教育 幼児期の見方・考え方について</p> <p>第 4 回 講義 社会に開かれた教育課程について</p> <p>第 5 回 講義 カリキュラム・マネジメントについて</p> <p>第 6 回 講義 学校教育全体で育成すべき資質・能力 幼児教育において育みたい資質・能力</p> <p>第 7 回 講義 主体的・対話的で深い学びの過程について</p> <p>第 8 回 講義 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について</p> <p>第 9 回 講義 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について</p> <p>第 10 回 講義 幼保小の架け橋プログラムについて</p> <p>第 11 回 講義 次期幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領等の改訂に関する中央教育審議会等の資料に基づく最新情報について</p> <p>第 12 回 講義 研究テーマに基づく発表</p> <p>第 13 回 講義 研究テーマに基づく議論</p> <p>第 14 回 講義 研究テーマに基づくまとめ</p> <p>第 15 回 講義 総合討議</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特になし。適時、資料等を提示する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>事前に資料等を熟読し、理解を深めるとともに、授業後に研究テーマとの関連を通してまとめる。(各週 3 時間)</p>			

[授業科目名] 幼児教育学特論Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 津金 美智子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ <p>本授業では、幼児教育学特論Ⅰの理論を踏まえて、幼児教育の不易と現代的な課題について把握し、幼児期の子供の具体的な姿を根拠として、発達や学びの姿を深く読み取り分析するとともに、指導(環境の構成、援助等)の在り方を追究する。</p> <p>【到達目標】① 幼稚園等にて幼児の観察を通じた記録から、幼児期の学びの特性を分析できるようになる。 ② ①を通して、研究テーマについて具体的な実践を根拠に検証できるようになる。</p>			
授業の概要 <p>本授業は、設定した幼児期の教育に関するテーマに基づき、幼児の遊びや生活を観察し、その分析を通して省察する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>各回における授業への姿勢と最終レポートにより評価する。(授業姿勢 20% レポート 80%)</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等) 授業計画 第 1 回 オリエンテーション 授業の概要 目的 第 2 回 演習 観察の視点と記録の方法 第 3 回 演習 記録を通じた読み取り 内面理解 第 4 回 演習 記録を通じた読み取り 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿からの分析 第 5 回 演習 記録を通じた読み取り 幼児期に育みたい資質・能力の視点からの分析 第 6 回 演習 記録を通じた読み取り 自発的な活動としての遊びを通して育まれることについて 第 7 回 演習 記録を通じた読み取り 主体的・対話的で深い学びの視点からの分析 第 8 回 演習 記録を通じた読み取り 小学校教育における各教科等とのつながり 第 9 回 演習 記録を通じた読み取り 体験の多様性と関連性 第 10 回 演習 記録を通じた読み取り 発達や学びの連続性について 第 11 回 演習 記録を通じた読み取り 小学校教育との円滑な接続からの分析 第 12 回 演習 研究テーマに基づく検証 第 13 回 演習 研究テーマに基づく議論 第 14 回 演習 研究テーマに基づくまとめ 第 15 回 演習 総合討議			
使用教科書 <p>特になし。適時、資料等を提示する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>事前に観察記録をまとめ、読み取り、及び、授業テーマに沿った分析を行い、研究テーマとの関連を通して省察を行う。 (各週 3 時間)</p>			

[授業科目名] 保育内容特論 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 渡辺 桜
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業では、「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」について学ぶために、保育内容における「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性を理解することが到達目標である。			
授業の概要 保育における「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」にかかわる文献や先行研究を読み込みながら、保育内容との関連を討論していく。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を合算して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 乳幼児期の保育内容における「環境」の必要性（講義） 第2回 「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性とは（講義） 第3回 乳児期の「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性（講義） 第4回 幼児期の「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性（講義） 第5回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」とは（講義） 第6回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(乳児) ビデオ視聴または保育施設におけるフィールドワーク（演習） 第7回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(乳児)の振り返り（演習） 第8回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(幼児) ビデオ視聴または保育施設におけるフィールドワーク（演習） 第9回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(幼児)の振り返り（演習） 第10回 保育の場における保育者の育ち（演習） 第11回 「対話」が支える子ども・保育者・保護者の育ちあい（演習） 第12回 「対話」とは何か（演習） 第13回 保育の質の向上を目指す研修のあり方（講義） 第14回 保育の質の向上を目指す研修の実際 保育施設におけるフィールドワーク（演習） 第15回 まとめ（演習）			
使用教科書 その都度指定する			
自己学習の内容等アドバイス 保育における「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」にかかわる文献や先行研究より、保育内容における「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性を分析しておきましょう。週2時間程度。			

[授業科目名] 保育内容特論Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 渡辺 桜
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業では、保育内容特論Ⅰを踏まえて、保育内容の核となる遊びに関連した文献や園での遊びの実践事例を参考にしながら、『遊び』を通しての教育』という理念について理解することが到達目標である。			
授業の概要 保育内容特論Ⅰで理解を深めた「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」について、実際の保育現場でのフィールドワークを基に具体的に分析・考察する。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を合算して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 保育における「物的環境」「空間的環境」「人的環境」とは何か 第2回 物的環境に関する先行研究の分析 第3回 空間的環境に関する先行研究の分析 第4回 人的環境に関する先行研究の分析 第5回 「子どもの主体性」のみに着目することの危険性 第6回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(大規模園) ビデオ視聴または保育施設におけるフィールドワーク 第7回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(大規模園) 振り返り 第8回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(小規模園・異年齢保育) ビデオ視聴または保育施設におけるフィールドワーク 第9回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(小規模園・異年齢保育)振り返り 第10回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(インクルーシブ保育) ビデオ視聴またはフィールドワーク 第11回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」の実際(インクルーシブ保育)振り返り 第12回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」を踏まえた子育て支援 第13回 「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」を踏まえた子育て支援の可能性 第14回 保育の質の向上を目指す職場風土の実際 フィールドワーク 第15回 まとめ			
使用教科書 その都度指定する			
自己学習の内容等アドバイス 保育における「子どもの主体性と保育者の意図のバランス」にかかわる実践事例や保育者の語りより、保育内容における「物・人・場」「物・人・こと」の相互の関連性を分析しておきましょう。週2時間程度。			

[授業科目名] 保育内容研究演習 A		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 藤井 真樹
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 人間の発達過程を他者との関係性の変容として捉える「関係発達」の理論の考え方・原理、およびその観点から保育内容を考えていくことができるようになることが到達目標である。特に領域「人間関係」を中心に、関係発達論の立場を理解し、自らの研究領域をあらためて問い直すことにより、研究課題への新たな示唆を得ることを目的とする。			
授業の概要 鯨岡峻著『ひとがひとをわかるということ』をテキストにそれを各章ごとに読み込みながら、関係発達論への理解を深める。並行して自らの研究領域の文献講読の発表を行い、関係発達論からの新しい手がかりを得る。			
学生に対する評価の方法 発表を含めた授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2回 関係発達論への導入 第3回 関係発達論とは（1）両義性 第4回 関係発達論とは（2）間主観性・間身体性 第5回 関係発達論とは（3）相互主体性 第6回 ひとがひとをわかることとは 第7回 他者を理解することと他者と「共にある」こと 第8回 大人が子どもを理解することとは 第9回 「主体である」とはどういうことか：子どもが主体であることの意味 第10回 相互主体性の観点から「育てる」ということを考える（1）主体としての二面性 第11回 相互主体性の観点から「育てる」ということを考える（2）心の育ちへの定位 第12回 乳児期の相互主体的な関係を事例から考える 第13回 幼児期の相互主体的な関係を事例から考える 第14回 自らの研究領域への関係発達論からの問い直し 第15回 まとめ			
使用教科書 鯨岡峻著『ひとがひとをわかるということ：間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房 藤井真樹著『他者と共にあるとはどういうことか』ミネルヴァ書房 その他、適宜必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 事前にレジュメを作成しそれに基づき毎回報告する。 テキストをよく読み、疑問点などをまとめておくようにしてください。（週 120分）			

[授業科目名] 保育内容研究演習B		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 中島 卓裕
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 子どもの育ちに関するデータを扱う「量的研究」に加えてエピソード記述やインタビュー、当事者研究といった様々な「質的研究」にあたることを通して、人間科学における研究の意義を学び、実践者としてと同時に日常生活を生きる1人の当事者として他者を理解することについての理解を深める。			
授業の概要 量的研究・質的研究の手法を学ぶと同時に、様々な事例研究の論考を熟読し、他者理解への洞察を深める。特に他者との関わりにおけるコミュニケーションについて、質的側面と量的側面の両側面からの理解を深めることを目指す。			
学生に対する評価の方法 発表を含めた授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2回 人間科学における「研究」の理解 第3回 人間科学における「量的研究」の実際（1） 第4回 人間科学における「量的研究」の実際（2） 第5回 人間科学における「量的研究」の実際（3） 第6回 人間科学における「質的研究」の実際（1）観察及びその様々な記録法 第7回 人間科学における「質的研究」の実際（2）インタビュー法 第8回 人間科学における「質的研究」の実際（3）当事者研究 第9回 保育における「研究」の位置づけ 第10回 保育に関する先行研究の理解（1） 第11回 保育に関する先行研究の理解（2） 第12回 子どもの発達に対するアプローチ（1） 第13回 子どもの発達に対するアプローチ（2） 第14回 他者と「共に生きる」とはどういうことか 第15回 まとめ			
使用教科書 教科書は指定しない。適宜必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 扱った内容をよりよく理解するために積極的な参加をしていただきたい。 予習：次回の授業内容について、事前に調べておくこと（30分） 復習：その日に学んだ内容について振り返り、関連する事項や授業内で提示した参考文献や引用文献を自分で調べ、理解すること（60分）			

[授業科目名] 初等教育特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 青木 一起
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>(テーマ) 生徒指導及び授業の内容、方法等に求められる不易と流行。 (到達目標) 現代の教育課題を視野に入れながら、児童の指導や授業を構成する各教科についての調査及び分析を行う。また、課題解決に向けた教材化を図るとともに、明確な課題意識を醸成し、総合的な実践力を身に付けることができるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>学習指導要領及びその背景となる現在の社会的背景や生徒指導の在り方をとらえながら、各教科の教科内容と指導法などを文献研究等により検討していく。また、その結果を踏まえ、新しい教材や単元を提案し分析を行う。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>授業への参画態度 40%レポート 60%で評価する。</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第 1 回 オリエンテーション ―授業の概要説明等― 第 2 回 子どもの発達と教育学研究からみた小学校教育の今日的課題 第 3 回 学習指導要領 (小学校) 編の批判的検討 第 4 回 教育改革の動向と小学校の授業改善の方向性 (含: G I G A スクール構想) 第 5 回 生徒指導・教育相談の機能を生かした学級経営の理論と実際 第 6 回 学習指導論特講 (初等教育の内容と方法・教材論) 第 7 回 特別支援教育と学校組織マネジメント 第 8 回 初等国語科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 9 回 初等算数科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 10 回 初等社会科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 11 回 初等理解・生活科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 12 回 初等音楽科・図工科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 13 回 初等家庭科・体育科における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 14 回 道徳・外国語活動・特別活動における授業づくりと教科内容研究と学問研究 第 15 回 まとめと初等教育演習に向けた課題設定</p>			
<p>使用教科書</p> <p>小学校学習指導要領 (平成 2 9 年告示) 文科省</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>各教科の指導法の学問研究の動向を調査しておく (120 分) これまでに作成した各教科の学習指導案や模擬授業の理論的背景を明確にし、考察しておく (120 分)</p>			

[授業科目名] 初等教育演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 青木 一起
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>(テーマ) 理論と実践との往還 (到達目標) 初等教育特論を踏まえ、初等教育の自ら選んだ教科に焦点をあて専門研究の対象とし、深い学問研究と高い教育的実践力の融和を目指して、授業研究における理論と実践との往還について、広い視野から考察することのできる資質・能力を育むことができるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>院生の研究課題およびその背景にある研究動向を、初等教育における各教科内容研究の視点と関連付けながら捉え直すとともに、その知見を実際の授業づくりにおける教材開発に適用する試みを通すことによって、理論と実践との関連性について考察する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>授業への参画態度 40% 課題研究レポート 60%で評価する。</p>			
<p>授業計画 (回数ごとの内容等)</p> <p>第 1 回 オリエンテーション —授業の概要説明等— 第 2 回 教育経営学の研究動向 (学校組織マネジメント) 第 3 回 教育研究のための質的研究 (量的アプローチと質的アプローチ) 第 4 回 授業という営み「主体的に学ぶとは」(含: ICT活用の理論と実践) 第 5 回 学力調査の分析からみる授業研究の在り方と課題 (研究教科) の設定 第 6 回 研究教科の教材・授業の先行研究の調査① (教材研究の調査) 第 7 回 研究教科の教材・授業の先行研究の調査② (授業実践事例の調査) 第 8 回 研究教科の教材・授業の先行研究の検討 第 9 回 研究教科の教材・授業研究の課題設定 第 10 回 研究教科の教材・授業研究の課題検討① (授業デザインの検討) 第 11 回 研究教科の教材・授業研究の課題検討② (学習指導案の検討) 第 12 回 研究教科の教材・授業研究の実践 第 13 回 研究の成果と課題 (授業分析の理論と方法) 第 14 回 授業記録作成と報告書作成 第 15 回 まとめ (報告書のプレゼンテーション等)</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特に指定せず。自らの研究内容に沿って選択する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>自らの課題意識による専門教科及び領域を選択し、事前に調査・検討をしておく (120 分)</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童の表現文化特論 A		講義	林 麗子
[単位数]	[必修・選択]	備考	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 子ども達の表現行動の中で主として動作や身振りまたそのリズム特性から、幼児・児童期の子どもの表現を理解できる。また、戦後教育における身体表現の意味づけを通して、時代の大人たちの教育観や期待を理解できる。さらに、子どもの身体表現の現在と今後の展望について論じることができる。			
授業の概要 子ども達の表現行動の中で主として動作や身振りまたそのリズム特性に関する文献を抄読する。また、戦後教育における身体表現の内容を概観し、時代の大人たちの教育観や期待を探る。さらに、子どもの身体表現の「今」について、文献・資料を収集するとともに、実際の教育現場に赴き、最終レポートにおいて、各自課題を設定し、総括的に考察する。			
学生に対する評価の方法 授業内でのやり取り（30%）および最終レポート（40%）において講義内容の理解度、子どもの表現に対する興味や関心、及び研究的視点の有無を評価し、授業への参加態度（30%）を加味して総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の概要と目的、スケジュール、評価、教科書・文献の紹介など） 第2回 幼・児童期の発育発達に伴う表現特性（言葉・動作・リズム・音楽や絵画表現）についてこれまでに得た知識や体験の確認 第3回 「子ども文化の原像」の第2章の講読、考察と意見交換 第4回 主として身体的表現に焦点をあて、幼・児童期の表現特性について文献の抄読 ① 幼児・児童期の自然な表出動作とそのリズム特性 第5回 前回の文献の考察と意見交換 第6回 主として身体的表現に焦点をあて、幼・児童期の表現特性について文献抄読・講述 ② 幼児・児童期の対人コミュニケーション動作・身振り特性 第7回 前回の文献の考察と意見交換 第8回 戦後の幼児教育における身体リズム表現領域の内容（幼稚園教育要領の変遷を概観） 第9回 戦後の児童（小学校）教育におけるダンス表現領域の内容（体育科指導要領の変遷を概観） 第10回 創造的表現とフォークダンスや現代的リズムのダンスなどの型のある表現の教育的意味について 第11回 幼稚園や小学校の遊戯会、運動会の見学 ^(※注) 第12回 見学に対する意見交換と各自のまとめレポート 第13回 子どもたちのからだ表現の今 ― 課題とテーマ決定 第14回 各自の課題テーマに沿って、レポートとプレゼンテーション 第15回 授業のまとめ ※ 見学日程については、スケジュール変更の可能性がある。			
参考書 ① 岩田慶治編：子ども文化の原像、日本放送協会、1985 ② 野村雅一・市川雅編：「技術としての身体」、叢書身体と文化より、大修館書店、1999 ③ 菅原和孝・野村雅一：「コミュニケーションとしての身体」叢書身体文化より、大修館書店、1996			
自己学習の内容等アドバイス 教科書の内容理解からさらに他の資料へ関心を広げ、各自で文献収集・抄読ができると良い。身近な乳幼児の身振りやしぐさ、乳幼児を取り巻く大人とのコミュニケーションなど、日頃から興味を持って観察できると良い。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童の表現文化特論 B		講義	岡田 暁子・水谷 誠孝
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ			
乳幼児・児童期の発達を関連付けながら、表現との関わりについて理解し、音楽や造形を視点とした表現の芽生えやプロセスについて、検討、考察することができる。また、保育・教育等の活動事例や地域の取り組み等から、文化としての音楽活動・造形活動への誘いや教育としての意義について自身の考えをもつことができる。			
授業の概要			
文献の輪読をとおして、独創的かつ学際的な視点から子どもと音楽・造形の多用な関わりとその意義について、ディスカッションしながら理解を深めていく。また、地域や教育現場の取り組みの事例を調査収集し、文化としての音楽・造形と幼児・児童の育ち、またそれに関わる教育の在り方について考える。授業での取り組みを振り返り、自身で設定したテーマに沿って最終レポートを作成する。			
学生に対する評価の方法			
レポート (30%)、提出物 (20%)、ディスカッションや発表の内容 (30%)、授業への参画態度 (20%) など総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第1回 ガイダンス (授業のテーマ、概要、方法、見通し、参考図書の紹介など)			
第2回 音楽教育について① (学習指導要領の現状と課題)			
第3回 音楽教育について② (カリキュラムデザインと教師の役割)			
第4回 音楽教育について③ (マイミュージックの提案)			
第5回 音楽教育について④ (マイミュージックを用いた指導案作成)			
第6回 美術教育概論① (美術教育の理念教育課程)			
第7回 美術教育概論② (現状と実践的な課題)			
第8回 遊びと造形活動① (遊びと表現について)			
第9回 遊びと造形活動② (実践とその課題について)			
第10回 学外における教育現場の活動事例の視察および体験① (下調べ)			
第11回 学外における教育現場の活動事例の視察および体験② (見学)			
第12回 学外における教育現場の活動事例の視察および体験③ (実践)			
第13回 学外における教育現場の活動事例の視察および体験④ (考察)			
第14回 レポートテーマの設定			
第15回 レポート内容の発表、まとめ			
使用教科書			
随時プリントを配布する。			
参考書：小川昌史他編『よくわかる音楽教育学』ミネルヴァ書房,2023			
大橋功監修編著・新関伸也編著『美術教育概論 新訂版』日本文教出版,2018			
自己学習の内容等アドバイス			
参考文献を事前に読み、関連する事柄を調べるなどしてノートにまとめる。また、プレゼンテーションやレポート作成の準備を行う。(週2時間程度)			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校保健学特論A		講義	酒井 多香子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ			
本講義においては、学校保健の3領域（保健教育、保健管理、保健組織活動）それぞれが相互に関連を持たせた総合的な取組に成っているか、現場の養護教諭の実際の活動から検討する。また、子どもの健康に関わる法令から現在の学校保健活動で注視したい課題を理解する。最終的には、学校保健活動を計画・実施・評価・改善（PDCA）を適切に行うことができるようになる。			
授業の概要			
学校現場で直面している健康課題を分析し、より適切な学校保健活動の展開について学ぶ。授業は講義を基盤としつつ課題探求型の学習を取り入れ、受講者が関心のあるテーマについて調査・検討し、課題解決の方法を模索する。講義内容と関連付けながら、課題研究（レポート）の作成および成果の共有（簡易プレゼンテーション）を行い、理解を深める機会とする。			
学生に対する評価の方法			
討議等の授業態度10%、課題研究（レポートおよびプレゼンテーション）40%、小論文50%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 授業のオリエンテーション 授業の目的、講義内容の概要の説明			
第2回 学校教育と学校保健 学校保健計画の作成手順			
第3回 学校保健活動の実態①（保健管理領域）心身の健康管理編			
第4回 学校保健活動の実態②（保健管理領域）学校生活の管理・学校環境衛生の管理編			
第5回 学校保健活動の実態③（保健教育領域）教科保健・関連教科編			
第6回 学校保健活動の実態④（保健教育領域）道徳科・特別活動・総合的な学習の時間編			
第7回 学校保健活動の実態⑤（保健組織活動）学校保健委員会・地域学校保健委員会編等			
第8回 子どもの健康実態把握の仕方についての検討			
第9回 子どもの健康に関わる法令			
第10回 健康教育の動向① 学校感染症対策			
第11回 健康教育の動向② 安全教育と危機管理			
第12回 健康教育の動向③ 個別の健康課題に応じた健康相談			
第13回 学校保健活動の評価のあり方についての検討			
第14回 これからの学校保健活動の進め方			
第15回 まとめ、小論文提出			
使用教科書			
テキストは使用しない。授業中に適宜資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス			
〈事前学習（90分）〉各回のテーマに関する配付資料や指定文献を読み、基礎的な内容を整理しておく。必要に応じて関連する法令や学校保健の動向を簡単に確認する。			
〈事後学修（90分）〉講義内容の振り返りを行い、理解を深めるための要点整理を行う。あわせて、課題研究に向けた文献収集・調査、レポート作成の準備などを進める。より効果的な学校保健活動を実施するにはどうしたらよいか問題意識をもって講義に臨んでほしい。			

[授業科目名] 学校保健学特論B		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業においては、最新の学校保健の動向を知るために、保健管理、学校環境衛生、保健教育および学校保健に関する組織・団体の各分野の動向が分かるようになる。とりわけ、感染症が拡大する状況下になった前後で、学校での対応（衛生管理、歯科保健のあり方、メンタルヘルス、ワクチン等）について検証していく。			
授業の概要 例えば新型コロナウイルス感染症流行下において学校保健活動がどのように変化を遂げたか、分野ごとに検討する。通常は、配布資料を見ながら学校保健活動全般について検証し理解を深めていく。また、課題研究（レポート）を課す回もあるので、準備すること。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度20%、課題研究（レポート）40%、授業内容の理解度40%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 特論Bで扱う学校保健、はじめに、評価の仕方 第2回 PHR（パーソナルヘルスコード）と学校健診 第3回 新型コロナウイルス感染症流行の動向と学校保健① 衛生管理マニュアル、感染症対策の動向 第4回 新型コロナウイルス感染症流行の動向と学校保健② 子どもたちへの影響 第5回 新型コロナウイルス感染症流行の動向と学校保健③ ワクチン 第6回 健康管理の動向① 児童生徒の発育・発達、感染症 第7回 健康管理の動向② 児童生徒の健康管理1 内科、眼科、耳鼻咽喉科 第8回 健康管理の動向③ 児童生徒の健康管理2 皮膚科、アレルギー科、整形外科 第9回 健康管理の動向④ 児童生徒の健康管理3 産婦人科、歯科・口腔外科 第10回 健康管理の動向⑤ 児童生徒のメンタルヘルス 第11回 健康管理の動向⑥ 児童生徒の事故・災害、教職員の健康管理 第12回 学校環境衛生の動向 コロナ禍における食中毒発生状況 第13回 健康教育の動向 保健教育、喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育、食育、心の健康教育等 第14回 学校保健に関する組織・団体の最近の動向 第15回 理解度確認、まとめ			
使用教科書 テキストは使用しない。授業中にプリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス シラバスや授業時に示す次回の授業の内容について調べ、ノートにまとめる（週120分）。 授業時に生じた疑問等について自分で調べ、ノートにまとめる（週120分）。			

[授業科目名] 養護実践特論 A		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 授業のテーマは、「養護教諭とは」「養護教諭の実践とは」を多角的に追求し考察することである。種々の資料の読みとりと批評を通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成することができるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 「養護教諭の歴史」、「養護教諭の職務」、「養護教諭論」の変遷などに関する資料（成書や公的文書・審議会答申など）を収集し、それらに表れた著者（研究者、実践者、市民）の「養護教諭観」を読みとる。これらの素材の読みとりとディスカッションを通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成する。			
学生に対する評価の方法 授業内での発表・討議への貢献度（10%）、課題レポート（40%）、総括レポート（50%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2回 養護の基本原則、養護の目的と機能、教育における養護 第3回 養護教諭の専門性（専門性の考え方、養護教諭の存在意義と歴史） 第4回 「養護教諭論」の変遷①養護教諭の活動と関連法規 第5回 「養護教諭論」の変遷②学校保健の領域構造と養護教諭の活動 第6回 「養護教諭論」の変遷③養護教諭の役割・機能 第7回 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議①保健室経営 第8回 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議②保健管理 第9回 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議③保健教育 第10回 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議④健康相談 第11回 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議⑤保健組織活動 第12回 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議①「普遍的養護教諭観」 第13回 養護教諭論 関連資料の読みとりと批評・討議②「時代のニーズに応じた養護教諭観」 第14回 総括レポート「私の養護教諭観」発表と討議 第15回 まとめ			
使用教科書 岡田加奈子・河田史宝編（2016）「現代の教育ニーズに対応した養護学概論」東山書房			
自己学習の内容等アドバイス 1. 「養護教諭の職務」、「養護教諭論」などの関連資料はできる限り広範囲にわたって収集すること。 2. 授業担当者が作成した資料や聞き取り調査結果などのオリジナルデータも含める。 3. 事前学習・復習（疑問点・意見等）・レポート作成に各1時間程度を充てる。 4. 授業計画は、授業の進行状況により前後することがある。			

[授業科目名] 養護実践特論 B		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 未定
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 養護教諭の専門性や果たすべき役割について理解を深め、養護教諭に求められる実践力の向上を図るとともに、養護実践の効果を科学的に検証できるようになる。			
授業の概要 養護教諭の実践に関する文献を検索し、養護教諭の職務・専門性や健康課題解決のための養護実践について討議する。その内容を踏まえて、各自が事例を含めた課題レポートを作成し、発表する。その過程で養護教諭に求められる役割について考察を深め、実践力の向上と養護実践の効果を検証する方法を学修する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（10%）及び課題レポート（40%）、総括レポート（50%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2回 養護教諭の職務と専門性（歴史的理解・アイデンティティ） 第3回 養護教諭の職務と専門性に関する討議 第4回 現代的健康課題に関する討議 第5回 健康課題解決のための方策に関する討議 第6回 課題レポートの作成、養護実践の目標と評価（PDCA） 第7回 養護実践に関する事例発表・討議（保健室経営） 第8回 養護実践に関する事例発表・討議（保健管理） 第9回 養護実践に関する事例発表・討議（保健教育） 第10回 養護実践に関する事例発表・討議（健康相談） 第11回 養護実践に関する事例発表・討議（保健組織活動） 第12回 養護教諭と研究（養護実践と実践研究） 第13回 実践的研究と研究的実践 第14回 これからの養護教諭論の発表・討議 第15回 総括レポートの作成、まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 1. 養護実践の事例は、書籍・雑誌等のほか、学会・研究会や地区での実践発表収録等からも収集することが望ましく、できる限り広範囲にわたって収集すること。 2. 事前学習・復習（疑問点・意見等）に1時間程度を充てる。 3. 授業計画は、授業の進行状況により前後することがある。			

[授業科目名] 栄養学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤木 理代
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>成長・成熟・加齢というライフステージの中で、生涯健康を維持増進させるために必要な栄養を、食べ物・人体・環境の観点から学ぶ。食べ物については、適切な食事内容および食べ方を理解できるようになる。人体については、各ライフステージの身体的特徴、食物アレルギーや生活習慣病などの疾患、食習慣・運動習慣と健康との関わりを理解できるようになる。環境については、子どもの食生活の実態や食育をめぐる家庭および社会状況、支援制度について理解し、適切な食環境を作るために、家族や社会が果たす役割を理解できるようになる。また、栄養教諭を含む管理栄養士と連携した教育活動を理解できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>成長・成熟・加齢というライフステージの中で、生涯健康を維持増進させるために、子どもの頃から、適切な生活習慣を身に付けることが重要である。この授業では、食べ物・人体・環境の観点から、各ライフステージの健康栄養問題を学び、議論し、子どもから大人までの食生活と健康との関わり方を学ぶ。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>課題（40%）及びレポート（60%）で評価を行う。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 1 回 体を作る栄養・体を動かす栄養 第 2 回 成長・成熟・加齢と食べ物の関係 第 3 回 母子栄養の現状と課題（食に関わる子育て支援） 第 4 回 子どもの食をめぐる現状と課題（孤食、偏食、やせ、肥満） 第 5 回 食育推進（給食を通じた食育の意義） 第 6 回 食育推進（地域連携） 第 7 回 課題発表とディスカッション1 第 8 回 食と疾患（食物アレルギー） 第 9 回 食と疾患（メタボリックシンドローム） 第 10 回 食と疾患（摂食障害） 第 11 回 課題発表とディスカッション2 第 12 回 体作りと運動（運動による骨格形成に必要な栄養素） 第 13 回 健康作りと運動（運動時のエネルギー代謝に必要な栄養素） 第 14 回 課題発表とディスカッション3 第 15 回 授業のまとめと振り返り 			
<p>使用教科書</p> <p>使用教科書なし（資料を配布する）</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>各授業のテーマについて、事前に書籍や Web 検索サイトなどで情報を収集し、現状を把握した上で問題提起を行い授業に臨んで下さい(60分程度)。授業後は、疑問に思ったことや、更に探求したい事柄について調べ、学習内容の理解を深めましょう(60分程度)。</p>			

[授業科目名] 学校看護学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 成瀬 美恵
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>学校現場ではさまざまな疾患や障害を抱えながら学校生活を送っている児童生徒が増加している。そして「インクルーシブ教育」の実現を目指しシステムが構築されようとしている。そのため学校現場で養護教諭に求められる役割は拡大している。様々な健康問題を抱える児童生徒の健康状態を把握し、突発的なことが生じた場合も含め、本人への対応だけではなく、関係者（学校職員、担任、管理者、保護者等）との協働・調整・説明と同意を得ながら判断し、対応を決定する。特にけがや事故、急変などの救急事態発生時には、時間の経過とともに求められる救急処置や看護は変化する。児童生徒ひとりひとりが学校生活を円滑に過ごせるよう、救急対応、疾患が治癒するまでの経過観察、また慢性的な経過をたどる場合の健康管理や健康支援について理解できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>養護教諭は児童生徒のけがや事故、疾患など様々な健康状態の異変に対応している。時には慢性疾患を抱えた児童生徒や医療的ケアが必要な児童生徒の急変に対しても、適切な判断に基づいた救急処置・援助ができるようにあらかじめアセスメントし、計画を立てて準備、実践へとすすめる。本講座では学校看護学の学校救急看護活動及び様々な疾患や障害をもつ児童生徒への健康管理について講義する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>授業参加態度（自分の意見を述べる、他者の発表に自分の意見を述べることができる）30% 施設見学参加状況 20%、およびレポート 2回(中間 20%+最終 30%)50% により総合的に評価する。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 学校救急看護/救急処置、自己の課題</p> <p>第2回 学校における救急事例①</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 事例の医学的判断 2) 非医学的・非医事的判断（症状以外のもの 学校生活、経済的、宗教的等） 3) 事例の事実の解釈や問題点の明確化 4) 問題点から対応を決定 5) 救急処置から治癒するまで救急処置・看護、保健指導、経過観察をする <p>第3回 学校における救急事例② 1)～5)</p> <p>第4回 学校における救急事例③ 1)～5)</p> <p>第5回 学校救急看護体制の課題と対策（自施設での課題への解決に向けて）</p> <p>第6回 救急事例に対する救急処置の実際</p> <p>第7回 学校救急看護と安全教育</p> <p>第8回 慢性疾患や障害を抱えた児童生徒の学校生活の現状と課題</p> <p>第9回 障害を抱えた児童生徒の健康管理</p> <p>第10回 障害を抱えた児童生徒の健康管理のための協働体制</p> <p>第11～12回 障害を抱えた児童生徒への教育と健康管理の実際（施設見学）</p> <p>第13回 インクルーシブ教育実現のための課題</p> <p>第14回 より健康な学校生活を送るうえでの現状分析と課題、対策</p> <p>第15回 まとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <p>必要に応じて資料を配布する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>現場での救急事例の判断や対応と専門書に記載されている理論とのズレ・差異について追究する。追究するために必要な文献や資料を受講前に収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。</p>			

[授業科目名] 健康教育学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 健康教育は国によってさまざまな仕組み、指導方法・指導内容で実施されているが、最終的に子どもたちが身につけるべき目標がヘルスプロモーションの理念、すなわち生涯を通じた健康の保持増進という基本的・普遍的な理念に基づくことは一致している。本特論の目標は、健康に関する科学的な知識や理解、基本的な生活習慣の確立の重要性を学び、さらに健康行動の定着に結びつけることを理解できるようにすることである。			
授業の概要 本特論は、まず包括的健康教育プログラム構築の意味を考える。次に情動科学に基づいた学校における心の健康教育、エピジェネティックスの視点を生かした健康教育、米国の健康教育と日本の薬物乱用防止教育というそれぞれ特色ある健康教育の取り組みの理論と実践について検証する。またプログラムの構築とその実践者について、「何を教えるのか」、「どう教えるのか」、「誰が教えるのか」という切り口で見えていく。			
学生に対する評価の方法 ・授業への参画態度 50% ・授業内容の理解度 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 オリエンテーション 授業の目的、講義内容の概要の説明 第 2 回 包括的健康教育プログラム 第 3 回 情動科学に基づいた学校における心の健康教育① 自己制御能力 START プログラム 第 4 回 情動科学に基づいた学校における心の健康教育② 被災地からみた必要性 障がい者対象 第 5 回 エピジェネティックスの視点を生かした健康教育 生命科学の知見を通して 第 6 回 米国の健康教育と日本の薬物乱用防止教育① アメリカと日本の比較 第 7 回 米国の健康教育と日本の薬物乱用防止教育② プログラム開発に対する実践的研究 第 8 回 包括的健康教育プログラムの構築とその実践者① 相談活動 運動習慣 第 9 回 包括的健康教育プログラムの構築とその実践者② 就学前に 実施者の国際比較 第 10 回 包括的健康教育プログラムの構築とその実践者③ 管理職から見た必要性 第 11 回 わが国における健康教育の動向① 保健指導 第 12 回 わが国における健康教育の動向② 教科保健 第 13 回 海外における健康教育の動向 第 14 回 私たちの包括的健康教育のこれから 第 15 回 学習のまとめ			
使用教科書 伊藤武彦、松村京子、鬼頭英明編著 「健康教育の理論と実践」 公益財団法人 日本学校保健会			
自己学習の内容等アドバイス シラバスや授業時に示す次回の授業の内容について調べ、ノートにまとめる（週 120 分）。 授業時に生じた疑問等について自分で調べ、ノートにまとめる（週 120 分）。			

[授業科目名] 健康教育学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>健康教育を推進する上で必要な指導計画及び評価方法についてヘルスプロモーションの理念に基づいて理解を深め、具体的な問題解決型の指導案や教材等を作成することができる。さらに模擬授業を実施、評価をすることでよりよい授業を実践することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>健康教育学特論の授業を踏まえて、教科保健及び学級（HR）活動における保健教育の指導案及び教材の作成、模擬授業の実施、さらに評価などの一連の実践的な演習を行い、健康教育の手法や技術を習得し、実践力及び指導力を高める。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への参画態度 30% ・ 模擬授業、プレゼン等の評価 40% ・ 授業内容の理解度 30% 			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第 1回 オリエンテーション 授業の目的、授業内容の概要説明</p> <p>第 2回 健康教育の内容と教材づくり① 保健教育の学力と教育内容</p> <p>第 3回 健康教育の内容と教材づくり② 保健教育の内容と教材</p> <p>第 4回 健康教育の内容と教材づくり③ 教材づくりとそのあり方</p> <p>第 5回 健康教育の展開① 指導案づくりと授業の展開</p> <p>第 6回 健康教育の展開② 授業における教師の力量</p> <p>第 7回 健康教育の展開③ 保健教育の展開事例 1 小学校編</p> <p>第 8回 健康教育の展開④ 保健教育の展開事例 2 中学校編</p> <p>第 9回 健康教育の展開⑤ 保健教育の展開事例 3 高等学校編</p> <p>第 10回 健康教育の評価① 評価における 3つの観点 評価の方法</p> <p>第 11回 健康教育の評価② 指導内容改善のための評価</p> <p>第 12回 実際に健康教育を実施する① 現代的健康課題の把握</p> <p>第 13回 実際に健康教育を実施する② 指導案及び教材を作成する</p> <p>第 14回 実際に健康教育を実施する③ 指導及び評価</p> <p>第 15回 学習のまとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導要領解説小・中・高等学校（保健・特別活動） ・ （参考図書）森昭三、和唐正勝 編著「新版 保健の授業づくり入門」大修館書店 ・ 必要に応じて資料配布する。 			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>シラバスや授業時に示す次回の授業の内容について調べ、ノートにまとめる（週 120分）。 授業時に生じた疑問等について自分で調べ、ノートにまとめる（週 120分）。</p>			

[授業科目名] 発達心理学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 藤井 真樹
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>「人が発達するとはどういうことか」について関係発達の観点に基づいて授業を進める。人が関係の中で育つ、ということについて理解し、育てる者に求められる態度について学び、臨床で活かすことができるようになることが到達目標である。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人の発達について、子どもと養育者の映し合う関係を基盤に立ち、その関係のコミュニケーションの諸相をさまざまな事例を通して概観していく。その過程において、「子どもから大人へ」ではなく、「育てられる者が育てる者」になっていくことへの理解を深める。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>各テーマが終わった時点で課題を出す。課題に対してのレポートを提出する。評価する観点は、レポートの内容やまとめ方、さらに感想ではなくより自らに引きつけた観点から理解をできているかに注目して評価する（70%）。また授業への参加活動態度および発表による（30%）。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回 オリエンテーション 第2回 「育てる者」になる難しさ 第3回 子どもと養育者の両義性 第4回 「育てられる者」から「育てる者」へ 第5回 ここまでの理解の発表と確認 第6回 乳児期の関係発達 第7回 幼児期の関係発達 第8回 養育の場の両義性 第9回 保育の場の両義性 第10回 ここまでの理解の発表と確認 第11回 障がい児の育つ場の両義性 第12回 コミュニケーションの「障がい」をどう考えるか 第13回 学童期・思春期の関係発達 第14回 青年期後期・成人期前期の関係発達 第15回 ここまでの理解の発表とまとめ 			
<p>使用教科書</p> <p>鯨岡峻「両義性の発達心理学」、ミネルヴァ書房 鯨岡峻「〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ」、ミネルヴァ書房</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>使用教科書に沿って進めるため、事前にしっかり読みこんでおくこと。また、授業での理解を具体的な子どもとの関わりに還元できるような力をつけてほしい。学修の目安時間：少なくとも3時間／1週間</p>			

[授業科目名] 発達心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 藤井 真樹
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ エピソード記述やインタビュー、当事者研究といった様々な「質的研究」を学ぶことを通して、人間の発達を捉え考えていく上における「質的研究」の意義を学ぶ。同時に、日常を生きる1人の当事者として他者を理解することの意味をあらためて考察し、実践者としての援助のあり方を再考する。			
授業の概要 質的研究の手法を学ぶと同時に、『接面の人間学』（鯨岡峻・大倉得史著）に収録されている論考を熟読し、他者理解について、「分かる」と「つながる」ことの違いを学ぶことを通して、ケアに関わる者として、他者と「共にある」というあり方を知る。特に『接面』というパラダイムの必要性について、従来の客観主義的研究との比較から学びを深めたい。			
学生に対する評価の方法 発表を含めた授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2回 人間科学における「質的研究」の実態（1）観察及びさまざまな記録法 第3回 人間科学における「質的研究」の実態（2）インタビュー法 第4回 人間科学における「質的研究」の実態（3）当事者研究 第5回 「人を育てる」営みを再考する：「接面の人間学」への入り口 第6回 心の動きへの洞察と「接面」概念 第7回 保育場面をいかに表現するのか：その方法 第8回 保育における「エピソード記述」の必要性（1）接面へのアプローチ 第9回 保育における「エピソード記述」の必要性（2）エピソード記述の共有 第10回 「接面」が立ち上がる場面を描く（1）エピソード記述の実践 第11回 「接面」が立ち上がる場面を描く（2）エピソード記述からの「理解」 第12回 「接面」を捉えるインタビューのあり方 第13回 さまざまな実践現場における「接面」（1）特別支援の場など 第14回 さまざまな実践場面における「接面」（2）音楽療法の場など 第15回 まとめ			
使用教科書 鯨岡峻著『関係の中で人は生きる』ミネルヴァ書房 藤井真樹著『他者と共にあるとはどういうことか』ミネルヴァ書房 その他、適宜必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 事前に指示した次回授業内容についてしっかり予習をし、理解を深めてから受講する。 学修の目安時間：少なくとも3時間／1週間			

[授業科目名] 臨床心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 中島卓裕
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を学び、児童・生徒をよりよく理解し、彼らの諸問題に取り組めるようになるのが、テーマである。そして、心理学の応用によって、諸問題をよく理解し、より高度な技量を身につけることができるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 臨床心理学のアセスメント法や面接法により、児童・生徒をより理解することが様々な現場で求められている。本授業では、さまざまな心理療法の技法を理解し、それらのカウンセリングにおける活用について学ぶことで、対人援助の基礎的知識を修得することを目的とする。前半は、臨床心理学を構成する概念やさまざまな学派の考え方とそれに基づく実践アプローチについて説明する。後半は、精神疾患や心理社会的問題の臨床心理学的な理解および支援について説明する。講義を中心とするが、理解を深めるために、授業内で話し合いの時間を設けたり、レポートを課したりすることがある。			
学生に対する評価の方法 受講態度・レポート（60％）と理解度確認（40％）の成績を基準とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 オリエンテーション、臨床心理学の歴史、基本概念 第02回 診断・見立て・アセスメント 第03回 アセスメント（1）知能検査 第04回 アセスメント（2）臨床検査、テストバッテリー 第05回 臨床心理学のアプローチ：精神分析的アプローチ 第06回 臨床心理学のアプローチ：行動論・認知論的アプローチ 第07回 臨床心理学のアプローチ：ヒューマニスティック・アプローチ 第08回 臨床心理学のアプローチ：システムック・アプローチ 第09回 臨床心理学のアプローチ：非言語的アプローチ 第10回 気分の変化の理解と支援：うつ、躁 第11回 不安な気持ちの理解と支援：社交不安症、場面緘黙 第12回 統合失調症の理解と支援 第13回 パーソナリティ障害の理解と支援 第14回 臨床心理学の研究 第15回 全体の振り返り、受講結果アンケートの実施			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 予習：次回の授業内容について事前に調べておく（30分以上） 復習：学んだ内容を振り返り、関連する事項や疑問点を調べておく（60分以上）			

[授業科目名] 臨床心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 中島卓裕
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を応用して、児童・生徒の問題に取り組む演習をするのがテーマである。現場の諸問題を心理学の活用によって理解できるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 まず、心理教育的アセスメントとは何かについて学び、さまざまなアセスメント方法についての理解を深める。次に、子どもとの面接法についてその技法を演習する。それについては、ビデオをみたり、テープを聴いたり、視聴覚教材も利用する。それらの仕上げとして模擬面接実習もする。さらに、自律訓練法や交流分析の実際についても学び、コラージュや箱庭も自分で作る。その上で、摂食障害、気分障害、不登校への対応をシミュレートする。			
学生に対する評価の方法 受講態度・レポート（60％）と理解度確認（40％）の成績を基準とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 心理教育的アセスメントとは 第02回 心理教育的アセスメントの方法 第03回 心理検査の活用 第04回 アセスメント（1）発達検査 第05回 アセスメント（2）知能検査 第06回 アセスメント（3）その他のテスト、心理検査について、テストバッテリー 第07回 面接法 子ども面接 第08回 カウンセリング技法 ビデオ鑑賞、模擬面接 第09回 自律訓練法の実際 第10回 交流分析の実際 第11回 コラージュ・箱庭療法の実習 第12回 ひきこもりの理解と支援 第13回 依存・嗜癖の理解と支援 第14回 不登校への対応 第15回 全体の振り返り、受講結果アンケートの実施			
使用教科書 使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 予習：次回の授業内容について事前に調べておく（30分以上） 復習：学んだ内容を振り返り、関連する事項や疑問点を調べておく（60分以上）			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学習・認知心理学特論		講義	赤嶺 亜紀
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ この授業では人の学習を支えるしくみや原理を理解できるようになることを目標とする。そして、学習に関わる問題への心理学的援助サービスの実践の素地を養う。			
授業の概要 G. シュタイナー著『新しい学習心理学 その臨床的適用』を精読し、人間の認知・学習のシステムについて受講者同士、授業担当者と討論する。			
学生に対する評価の方法 評価は主に学期末のレポートに基づくが、平常の授業態度（発言や質疑、討論への参加など）を考慮する。成績評価の配分は、期末レポート 50%、授業時の発言や討論への参加 50% を想定しているが、課題の達成度により若干変更することがある。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回： オリエンテーション（授業の概要、進め方等） 第 2 回： 1 章 白衣に対する恐怖—古典的条件づけ 第 3 回： 2 章 学習された心臓発作とは？—消去の問題 第 4 回： 3 章 だらしのない子の変身—新しい習慣へのシグナル 第 5 回： 4 章 トラブルメーカー・マイケル—オペラント条件づけと社会認知的学習 第 6 回： 5 章 「待つこと」と「なしですますこと」の学習—衝動と行動の制御 第 7 回： 6 章 向社会的行動の学習—社会認知的プロセスと社会的価値システムの獲得 第 8 回： 7 章 テスト不安克服の道—「脱感作法」を超えて 第 9 回： 8 章 グループリーダーのストレス対処学習—認知的な行動訓練と行為調節的認知の発達 第 10 回： 9 章 中高生の学習性無力感—非随伴性と原因帰属 第 11 回： 10 章 挿し絵入りテキスト文からの学習—メンタルモデルの構築 第 12 回： 11 章 語彙の学習—自己制御的・適応的学習 第 13 回： 12 章 教えることの学習—数のネットワークの構築 ピアジェの発生的認識論を超えて 第 14 回： 13 章 タクシー運転手の地理概念—認知地図の構築 第 15 回： 14 章 マッチ棒ゲーム—ゲシュタルト理論または洞察的学習			
使用教科書 G. シュタイナー 塚野州一・若井邦夫・牧野美知子(訳) 2005 『新しい学習心理学 その臨床的適用』 北大路書房			
自己学習の内容等アドバイス 授業に先立ち各章を読み、キーワードを確認し、疑問点を整理する。授業後は各章の末尾の「この章のポイント」を手掛かりに、理解度を確認する（予習・復習それぞれ 90 分）。			

[授業科目名] 学習・認知心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 赤嶺 亜紀
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 心理学の研究論文（和文・英文）の読解力をつけることを目標とする。また、論文の精読を通して、研究報告の基本的な様式を理解し、論文の執筆とプレゼンテーションのスキル向上を図る。			
授業の概要 学習・認知・知覚心理学領域を中心に、受講者が興味ある（修士論文研究に関連するものが望ましい）テーマの論文を選び、レポートする。そして、その研究論文の特徴や問題等について、受講者みなで討論する。			
学生に対する評価の方法 評価は主に担当テーマの発表と学期末のレポートに基づくが、平常の授業態度（発言や質疑、討論への参加など）を考慮する。成績評価の配分は、担当テーマの発表 40%、期末レポート 20%、授業時の発言や討論への参加 40% を想定しているが、課題の達成度により若干変更することがある。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回： オリエンテーション（授業の概要，進め方等） 第 2 回： 心理学の研究論文を手に入れる方法（1）：和文資料 第 3 回： 和文論文 テーマ(1)－① 第 4 回： " テーマ(1)－② 第 5 回： " テーマ(2)－① 第 6 回： " テーマ(2)－② 第 7 回： 心理学の研究論文を手に入れる方法（2）：英文資料 第 8 回： 英文論文 テーマ(1)－① 第 9 回： " テーマ(1)－② 第10回： " テーマ(1)－③ 第11回： " テーマ(2)－① 第12回： " テーマ(2)－② 第13回： " テーマ(2)－③ 第14回： 心理学領域の研究倫理 第15回： まとめ（学会発表，学会誌への投稿方法等） ※1つの研究論文を和文は2回，英文は3回にわたって取り上げるよう計画しているが，受講者数に応じて回数を調整・変更する。			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業に先立ち CiNii Articles や J-STAGE， EBSCOhost などのデータベースを活用して，各回のテーマに関連する文献資料を入手し，発表の準備をする。授業後は討論の内容を整理する（予習・復習それぞれ 90 分）。この科目に先立ち，学習認知心理学特論を履修していることが望ましい。			

[授業科目名] 特別支援教育特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉村 匡
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 障害のある幼児児童生徒における教育の歴史と現状並びに障害児・者に対する社会の意識の変化や福祉制度等について、特別支援学校や学級等における具体的な教育内容の事例や映像資料を挙げながら講義並びに討議形式で概観する。また通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒や、成人した発達障害の人達の生きにくさについて、映像資料を用いて、その特性の理解並びに支援の方策について理解を深めることができる。 この講義を通して、心理臨床や保育・教育の現場で出会う機会が多い発達障害について、その子どもと家族への支援について検討・考察できるようにする。 更に「障害児教育」の歴史や現状を知るとともに、支援のための基礎的な理論・方法と社会制度の変化や関係諸機関との連携の在り方などを包括的に学ぶことをねらいとする。			
授業の概要 特別支援教育における教育実践とその課題について、障害の理解と支援の在り方や方法に焦点を当てて講義・討議を展開する。			
学生に対する評価の方法 評価は、講義への参加・発言（30%）、課題の発表・討議（30%）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方）等で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 各回の講義内容についての説明・既習事項の確認・受講内容に関する要望調査 第 2 回 特別支援教育の理念と歴史(主として視覚障害について) 第 3 回 新しい障害観とユニヴァーサル・デザイン【ICIDH から ICF へ】(主として聴覚障害について) 第 4 回 SLD(限局性学習症)特に発達性ディスレクシアに焦点を当てて 第 5 回 ADHD(注意欠如多動症)の児童へのアプローチ 第 6 回 ASD(自閉スペクトラム症)の理解と対応 第 7 回 個別の教育支援計画と個別の指導計画、校内員会の実際 第 8 回 心理アセスメントの実際 第 9 回 少年非行と発達障害への対応(コグトレ演習) 第 10 回 脳性麻痺の片麻痺体験及び摂食障害と指導方法 第 11 回 教育における支援技術(AT)の発展 第 12 回 医療的ケアの現状と課題 第 13 回 福祉・医療機関との連携と情報共有について 第 14 回 教職員の専門性の確保について 第 15 回 特別支援教育の意義と展望			
使用教科書 特になし(講義の都度、資料を用意する)			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の講義の終わりに、次回の講義に関する論文・参考図書を紹介するので通読し事前学習とすること(約 45 分)。また講義後は、関心のある内容について論文を検索(約 45 分)し簡易なレポートで報告すること。 主な参考図書 ① 「発達障害の子どもたち、『みんなと同じ』にならなくていい。」長谷川敦弥作・SB 新書 ② 「みえるとか みえないとか」ヨシタケシンスケ作・アリス館 ③ 「もうあかんわ日記」岸田奈美著・ライツ社 ④ 「働く、ということ」佐藤仙務作・彩図社 ⑤ 「怠けてなんかない!②」品川裕香著・岩崎書店			

[授業科目名] 学校教育相談特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業のテーマは、子どもの発達・人格の成長を促すために、教育相談・生徒指導・キャリア教育においてどのような指導・支援が求められているのかを理解することである。以下の3点を到達目標とする。 (1) 教育相談・生徒指導・キャリア教育の意義と役割について理解する。 (2) 教育相談の基盤となるカウンセリングの基礎知識・技法について理解する。 (3) 教育相談における課題について理解し、具体的な対応や展開の在り方について考察する。			
授業の概要 教育相談・生徒指導・キャリア教育の役割や教育相談の基盤となるカウンセリングの理論や技法を理解し、子どもと学校を取り巻く様々な課題について具体的な対応を探求するプロセスを通して、これからの教育相談の在り方を考察する。			
学生に対する評価の方法 授業内での発表・討論への貢献度（10%）、提示するレポート課題（60%）、総括レポート（30%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・教育相談・生徒指導・キャリア教育の目標・意義と役割 第2回 キャリア教育の目標・意義と内容 第3回 キャリア教育の具体的な展開 第4回 教育相談の基盤となるカウンセリングの技法 第5回 子どものアセスメント（教師・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー） 第6回 不登校の歴史・実態・タイプ・背景と支援の実際 第7回 いじめ問題の理解と支援・重大事態への対応 第8回 非行問題の理解と対応 第9回 精神疾患と心身症の理解と対応 第10回 配慮が必要な子どもの理解と対応 第11回 児童虐待と教育相談 第12回 保護者対応・支援の実際 第13回 学校教育相談の現代的課題の理解と対応 ①外傷体験（事件・事故・災害） 第14回 学校教育相談の現代的課題の理解と対応 ②ヤングケアラー 第15回 チームで行う教育相談・まとめ			
使用教科書 高岸幸弘・井出智博・倉岡智子（2018）「これからの教育相談」北樹出版			
自己学習の内容等アドバイス 「生徒指導提要」（文部科学省）を読み、学校教育相談のあり方を理解したり、日頃教育現場で問題となっていることに調べたりしておく。毎授業前後に事前学習・レポート作成、復習（疑問点・意見等）として各1時間程度を充てる。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校教育相談演習		演習	遠山 久美子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 本授業のテーマは対人援助職としての自己理解・他者理解を深めるとともに、基本的なカウンセリング技法を学び、事例を通して学校現場での確な支援ができる実践力を身に付けることである。 以下の3点を到達目標とする。 (1)実際にワーク等を通して対人援助を行うために必要な自己理解・他者理解を深める。 (2)基本的なカウンセリング技法を身に付け、児童生徒・保護者対応に生かす。 (3)教育相談をめぐる今日的課題に対して事例をもとに効果的な支援方法を学ぶ。			
授業の概要 他者を受容し、支援するためにはまずは自己理解が必要である。本授業では自己理解・他者理解のためのワークを行う。また、基本的なカウンセリング技法を学び、学校現場で起きやすい今日的事例を通して、その指導・支援方法や問題点を究めていく。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み姿勢（10%）、随時提示する課題レポート（40%）、総括レポート（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・自己理解・他者理解のワーク 第2回 自己理解・他者理解のワークと理論 ①構成的グループエンカウンター 第3回 自己理解・他者理解のワークと理論 ②コラージュ 第4回 自己理解・他者理解のワークと理論 ③箱庭 第5回 教育相談におけるカウンセリング技法 ①傾聴 第6回 教育相談におけるカウンセリング技法 ②ロールプレイ 第7回 教育相談におけるカウンセリング技法 ③ストレスマネジメント 第8回 学校で活用できるブリーフセラピー ①理論 第9回 学校で活用できるブリーフセラピー ②実践 第10回 特別支援教育と教育相談 第11回 保護者支援と教育相談 第12回 ケーススタディ 児童・生徒の理解と支援 ①ゲーム障害・摂食障害 第13回 ケーススタディ 児童・生徒の理解と支援 ②自傷行為・自殺予防教育 第14回 ケーススタディ 児童・生徒の理解と支援 ③性の多様性 第15回 コンサルテーション・教育相談体制の課題・まとめ			
使用教科書 毎講義に配布するテキスト(レジュメ)を使用する。			
自己学習の内容等アドバイス 教育現場で問題となっていることに関心を持ち、調べておく。事前学習（1時間程度）や課題レポートの作成を行う。復習（疑問点・意見等）に1時間程度を充てる。			

[授業科目名] 特別研究		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 指導教員
[単位数] 8	[必修・選択] 必修	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ 修士論文の作成に向けて、関係する論文の読み方、書き方を理解し、各自が設定した研究課題に関する修士論文を作成していく。</p>			
<p>授業の概要 授業は、個別指導とゼミナール形式で行う。個別指導においては、関連する論文を通して論文の読み方、書き方の指導を行う。また、ゼミナールでは各自が自分のテーマと関連した研究論文について発表する。発表後は内容を検討しながら先行研究における諸課題を明らかにし、修士論文作成まで指導を行っていく。</p>			
<p>学生に対する評価の方法 研究への取り組み度並びにゼミナールのプレゼンテーション力など総合的に評価を行う。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等） オリエンテーション・個人指導・ゼミナール等を適宜実施していく。</p>			
<p>使用教科書 適宜紹介をしていく</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス 2年間の研究成果が導き出せるよう、積極的に取り組むこと。</p>			